

目次

320	253	153	73	11	5
エピローグ	第四章	第三章	第二章	第一章	序
	結末	悪意	既視感	予兆	

332 江戸川乱歩賞の沿革及び本年度の選考経過

341 江戸川乱歩賞授賞リスト

343 第60回(平成26年度)江戸川乱歩賞応募規定

装幀 岡孝治

襲名犯

序

新田秀哉は、その日、朝焼けより前に目を覚ました。夜の闇は、新田の心をいつも落ち着かせた。

夢を見ていた気がした。夢の輪郭を掴もうとしても、掬った水が零れ落ちるように、意識するより前のぼんやりとした形に霧消しそうになる。新田は思い出すことに飽き、欠伸を一つした。

もう一眠りするかと毛布の端を掴んだところで、夜が白みはじめたことに気づく。まだ眠っていたかったが、しばらくそれを眺めるのも悪くないという気持ちにもなった。

やがて、雀の声が聞こえはじめた。雀の声に引つ張られるように太陽が昇り、六月の朝日は五時を回る頃、完全に夜の気配を消し去った。どれくらいそうしていただろう。突然名を呼ばれた。いつものモーニングコールだ。だが、その日は勝手が違った。呼ばれると同時に解錠の音が出て、数人の男達が彼の部屋に入ってきた。いささか面食らったが、すぐにそれが何を意味しているかに気づく。気づくと同時に、ああ、今日なんだな、と思っただけだった。

新田は思う。自分は自由に生きすぎた。人々は彼に数々の名を与えたがった。「快樂獵奇殺人者」や「サイコパス」という通り一遍の名や、「加虐嗜好が高じて七人もの命を奪った鬼畜」、「悪意の塊」という遺族側に立った呼び名、そして「現代社会の闇」や「時代が生んだ殺人鬼」という、いささか首を傾げざるを得ない名、さらには「世紀末の悪魔」、「殺しの伝道師」などというB級ホラー映画のキャッチフレーズのような呼び名さえある。

数々の異名の中で、最たる物が「ブージャム」だった。由来はいまだによく理解できなかつた。彼がもらった手紙の中で、新田秀哉という名前より、「ブージャム」と呼ばれた回数の方が多かった。

先頭に立つ看守に導かれながら、新田は歩く。看守は他に、両脇に二人、背後に一人だ。執行される場所までは緑色の廊下があると何かの映画で観たが、黒の無機質なリノリウムタイルが連なるだけだ。高揚はない。ただ、何かを考えなければいけない気がした。

十四年前、現れた警官達に自分の身分を告げた際の顔を忘れられない。最初は冗談を言っていると思われたのか、半分は口角を上げ（笑おうとしていたのかもしれない）、もう半分は口角を下げた（怒ろうとしていたのかもしれない）。

逮捕されると同時に、安堵した。手錠がかかると同時に、道路を眺めた。赤い血が流れていた。

それからの日々はよく覚えていない。頼んでもいないのに弁護士が数人、弁護団を作った。そして弁護士達は、十代から六十代までの女性、十五人の熱烈なラブレターを渡してくれた。接見のたびに弁護士は女達のプロフィールを聞かせた。死刑制度反対の社会活動家もいれば、純粹な

自分の信奉者（もちろん自分の異名に憧れただけだろうが）もいた。大半の女達は、「あなたは孤独な人」と手紙を寄越した。

看守の歩みは遅々として進まない。自分はずっと早く歩きたいが、目の前の灰色の制帽は一步一步踏みしめるように歩き続ける。新田は、昔テレビで見た古いドラマを思い出した。花嫁と父親が歩く。ゆっくり流れる音楽に合わせて。今も音楽でも流れているのかと耳を凝らしたが、何も聞こえない。ただ、カツ、カツと間隔の空いた足音だけが鳴る。そう言えば俺は結婚もしたんだっけ、と新田は思った。

女の何人かに言葉を托した。彼女達は興奮し、弁護士の口を通じての会話のやり取りがあった。何人かのお気に入りができると同時に、弁護士は獄中結婚を勧めてきた。弁護士は、「結婚によって人間の心を取り戻したことを裁判で主張する」と言った。意味は理解できなかったが、断るのが面倒臭くて婚姻届に名前を書いた。

審理が進む中、妻と数度の面会をした。色が白く美しい顔をしていたが、常に目が泳いでいて、落ち着きのない女だった。視線は動き続けたが、何も言わない。だが、自分が話しかけると「私は選ばれたの。幸せだわ」と陶醉したように言った。

三度目か四度目かの接見で、飽きてしまった。幸せの理由を尋ねても、「選ばれたから」としか言わない女は一つ面白みがなかった。暇潰しに、頼み事をした。

「俺が望むことがわかるか？ それをして欲しい」

彼女は覚悟した表情で頷いた。それから四日後、彼女は頸動脈にカッターを突き立て、死んだ。看守に見せてもらった新聞を読む限りでは、自殺は経済的な事情というところで落ち着いた

らしい。看守が「ホードキーサーだろう」と言った。意味がわからなかったが、反省はした。自分は彼女に何も望んでいなかったのに。

二度目の結婚相手は最初の妻とは違い、よく喋った。一方的にひたすら死刑制度を批判する彼女に、すぐに嫌気が差した。

「何か、望むことはある？」そう聞かれたので、仕方なく、最初の妻と同じことを頼んだ。女は目に力を込めて、「任せて」と言った。どうやら死ぬつもりはないらしいと、少しだけ安心した。

自分は何を望んでいるのだろうか、そう思いながら二番目の妻を待った。しかし妻は現れず、弁護士が額の汗を拭きながらやって来た。

二番目の妻は死刑廃止のプラカードを持って拘置所付近で喚き散らし、警察に警告を受けた。自分の望みとは程遠いと感じ、同時に馬鹿らしく思えた。弁護士に離縁の手続きだけを頼み、独房で眠った。

新田は歩幅をわざとゆっくりにしたり、早めたりしたが、看守は自分の相手をするつもりはなさそうだった。仕方なく、また思い出に閉じこもる。

三人目の女だけは、少し気が利いていた。地味な女だった。新田の興味は既に、「俺は何を望んでいるのか」に変わっていた。それを妻達に明らかにしてもらおう、そう思っていた。

そうだ、三人目の女は、あいつに会いに行つた——。悪くなかった。悪くはなかった。でも、女……名前は忘れたが、馬鹿だった。

大きな嘆息が漏れた。前を歩く看守が足を止めて振り返つたので、少し小首を傾げて微笑む。一団は再び歩きはじめた。

妻は真剣な顔で、「私をもつと愛して欲しい」と言った。気が利く女だが、救いようのない馬鹿だと思い、その愚かさに慄然りりぜんとした。見返りが欲しいという女に弁護士を通じて既に捨てた物の在処ありかを教えたら、女は大喜びしてそれを捜しに行った。そのはしゃぐ顔が醜みにくくて、離縁はしなかつたものの二度と会わなかつた。そして自分は外の世界への介入をやめた。

それからは、夜と朝の繰り返しだった。審理は終わり、判決が出た。すべてを任せるとだけ告げてあつた弁護士は控訴し、裁判は長引いた。生きていたかつたわけではない。ただ、すべてを他人に任せることにしたのだ。最終判決が出てから七年。逮捕されてから十四年が経過して、ようやく最後の一日を迎えた。

歩調のせいであげに長く感じる廊下が終わり、扉の前に立った。

「教誨きょうかいは本当にいらぬのか？」看守が足を止めて振り返つた。

軽く頷うなずき返す。そして初めて、目の前を歩いてきた男が、毎朝、まだ生きてやがるとばかりに睨にらみつけてきた看守だということに気づいた。今日はまるで、自分が殺されるように青い顔をしていた。

短い階段を昇る。この階段をその足で降りた者はいないだろう。首に輪をかけられる。嵌はめ殺しのガラスの向こうには、会つたことのない男がいる。男はそわそわと腕時計を気にしている。上等なスーツを着ているところから、この場所の所長だろう。

「新田秀哉。六月二十一日。午前九時四十五分。死刑執行」

ガラスの向こうで男が言った。その声を聞きながら、ふと自分は何者だったのだらうと思う。天国も地獄も信じてはいない。この意識も数秒後には霧のように掻かき消える。元々、未練などは

ない。望みもない。だが強いて言うならば――。

少年の顔が浮かんだ。苦笑を堪える。既に自分が殺めた相手だ。だが、最期に思い浮かべる相手として相應しい気がした。

ふと、新田は思う。

今朝、俺はあいつの夢を見たのかもしれない――。

ガタンという、足下の床板が開く音がした。新田秀哉が最期に思ったことは、「まあ、いいか」だった。